

平成末年に振り返るゼミ指導： 山村ゼミにおける卒論集の記録2005～2018

山 村 英 司

1. はじめに

平成時代が終わりを告げる。日本の大学もグローバル化の社会経済環境の変化を受け、大きく変わりつつある。そして、2019年（平成31年）に元号が変わり、新たな時代に入る。日本はどこから来て、どこへ向かうのか？時代の曲がり角を迎えた今、大学における研究・教育はいかに変容していくのであろうか？新元号時代も、大学に勤務しつつける大学人にとって、否応なく直面する非常に大きな問題である。組織や制度は歴史的な連続性の影響から自由になることはない。過去と未来は連続している。未来を構想するためには、過去の実態を知り、そこから出発することが肝要であるように思われる。そこで私がこれまで、行ってきたゼミ指導の様子を記録しておく。

ゼミが歴史を刻むほど、ゼミに関する個別の記憶が混在するようになってきた。例えば、あるゼミ生のことは記憶しているのだが、そのゼミ生がいつ卒業したのか、その年の同期卒業メンバーの構成など曖昧になりつつある。ゼミの様子やそのときの空気感などについて、記憶が断片化されていく。そのうちにゼミ生の記憶自体も薄れ、消えていくのかもしれない。そうなる前に、一旦私の記憶を文書化しつつ整理したいと考えた。

2005年に最初にゼミナールの卒業生を送り出してから2019年度現在までゼミ指導を続け、13回の卒業生を送り出してきた。2010年度（平成22年度）までの卒業生の多くは、私と同じ昭和生まれだが、平成時代に育った学生達だ。2011年度（平成23年度）の卒業生からは、平成生まれの学生が大半となった。振り返ってみると、それぞれの期ごとに、ゼミの文化や特徴の違いがある。なぜ、このような違いが生じるのであろうか？大まかに、次の3つの要因が関係しているであろう。(1)私自身がゼミ生に

振り向けることが出来る時間は、諸事情によって年々減少している。また、私自身の年齢も上がっているのに、不器用ながら情熱で経験不足を補っていた状態から、徐々に厳しい時間制約の中で蓄積した経験をたよりにゼミ指導を行うようになった²⁾。(2)学生を取り巻くマクロ経済状況も違う。景気は就職活動の成否直接関わるものであり、ゼミ活動にも間接的に影響する。(3)偶然集まった学生個々の個性およびゼミ生同士の相互作用など、ミクロ経済分析の対象になるような側面もある。

上記の(3)に着目するならば、ゼミを構成した個別の学生には、あらゆるタイプのゼミ卒業生がいたことを思い出す³⁾。数名の学生は、3年次の演習Ⅰのみの参加者もいたが、多くのゼミ生は3年次および4年次にゼミに在籍し卒業証書を渡した⁴⁾。

以上のようにそれぞれの期、および個人に多様性があるゼミナールであるが、私はこれまで一貫して4年次における卒論指導に力を注いできた。今回、すべてのゼミ卒業期ごとに作成した、卒業論文集に目を通した。すでに13冊に達しているが、卒論(あるいは卒業レポート)のテーマを目にすると、それぞれの学生の性質や人生など

1) 卒業期によるゼミの特徴は、次のように形容される。明るく活気がある期、素直な学生が多い期、曲者ぞろいで制御困難な期、3年次は楽しそうに過ごしていたのに4年次になるとときに大量のゼミ脱退者が出た期、ヤル気がなさそうに見えてアウトプットの質は高い期、静かで癒しの時間が流れる期、福岡県出身が大多数を占める期、あらゆる県の出身者から構成される多様性が際立つ期、女子が多く男が小さくなっていた期、全員男だけの期。補足情報として、本資料の最後に、卒業期ごとの大まかな特徴を示した。

2) 2004年と2005年は韓国へのゼミ旅行を実施した。また、この時期には九州場所中に相撲の中村部屋訪問し「オカミさん」とディスカッションを行っている。相撲部屋訪問の様子は、2004年の11月に西日本新聞に取り上げられたこともある。

3) 個性派のゼミ生を、思いつくままに示しておこう。3年生の時に妊娠が発覚し、4年次に出産をした学生(ちなみに私の一番目の子供と同じ年にうまれた)。私のゼミに3年間に渡って4年ゼミ(演習Ⅱ)に在籍した経験を基に、私と一緒に各期の特徴の比較分析をした学生。タレント活動のためにゼミを欠席し、欠席の正当性を証明するために出演番組のDVDを私に提出していた学生。3年次には休みがちで落第しずれだったが、その後、心を入れ替え現在では優秀な研究者になっている学生。ゼミでやるべき課題はこなすがコンパには一切姿を見せなかった学生。プロ野球のレジェンドである稲尾投手と遠縁の学生。唯我独尊の気質をもつ野球部のピッチャーで、就職には減法強かった学生。少年少女囲碁大会で全国ベスト8であったことを隠していた音楽オタクの学生。見た目は優等生だがヘビメタを歌うと別人になる学生。スポーツに打ち込み2年留年した割に就職活動は順調だった学生。年齢が2歳上で入学したものの、中途退学して行った学生。家業の経営不振を支えるため金融会社に入社し好営業成績のこしている学生。ポートルーサーの育成学校を中退した後に、大検を受けて入学したにもかかわらず現役生と同じ年齢で卒業した学生。ジャニーズ事務所所属のアイドルのような風貌なのに自衛隊系列の高校を卒業した学生。

が反映されていることに気付く。卒論指導の際は、私も真剣である。学生向けに提案した卒論テーマ（例えばスポーツの経済学）は、指導しているうちにいつの間にか私自身の研究テーマになっていたものがある⁹⁾。つまり、教育していたつもりが、自然に学生と私の間に研究上の相互作用が生じていたわけである。ゼミ生は気がつかなかったと思うが、大きな目で見ると卒論指導は私の研究活動の一部をなしていたのである。

この資料において、まずは具体的な指導方法を記す。さらに、卒業論文の内容について簡単に言及する（この資料の最後に、具体的な卒業論文・卒業レポートのタイトルおよび、それぞれのゼミ卒業期生の特徴を記す）。卒業論文は、それぞれの学生が育った時代や、大学時代の世相を反映していた印象がある。時代が曲がり角を迎える今、私立大学の一教授の経験に限られたものではあるものの、この記録は平成時代の「大学生」の気質や考え方の記録として意味を持つだろう。

2. 山村ゼミにおける卒論認定と大まかなスケジュール

2003年度に西南学院に着任後、2004年度よりゼミ生を受け入れ、最初の卒業論文集を2005年度に作成し、2018年度まで毎年卒論集を作成した。卒業論文の形式および内容水準を厳格に設定し、それに達したものについて「卒論」とし、水準に満たないものを「卒業レポート」とした。表1にこれまでの、「卒論」数と「卒業レポート」数を示した。卒論比率の年次ごとの推移は図1のように描かれる。卒論と認めるために、すべての卒論には2～4回の修正指示を出している。このスケジュールを達成するために、おおよそ次のようなスケジュールにしたがって、卒論指導をしている。

4) 私がゼミを担当していた期間において、西南学院経済学部では、3年次のゼミの演習Ⅰは必修（卒業のためには必ず取得しなければならない単位）だが、4年次の演習Ⅱは必修ではない。したがって、4年次にはゼミに参加するインセンティブが低下する。そのために、3年次の単位を取得した場合、4年次にはゼミに参加しない学生も存在する。3年次のみゼミに参加していた個性派の学生としては、愛のある性行為を広めることにより出生率を上げるというユニークな構想を持っていた学生、大学入学前にイギリスのダンス学校を卒業し、ミュージカル俳優をしていた学生などがいる。

また、ゼミ在籍中に家業の倒産、学生生活に馴染めなかった、などの理由で退学した学生もいる。卒業証書を渡すことが出来なかったことが、今も残念である。

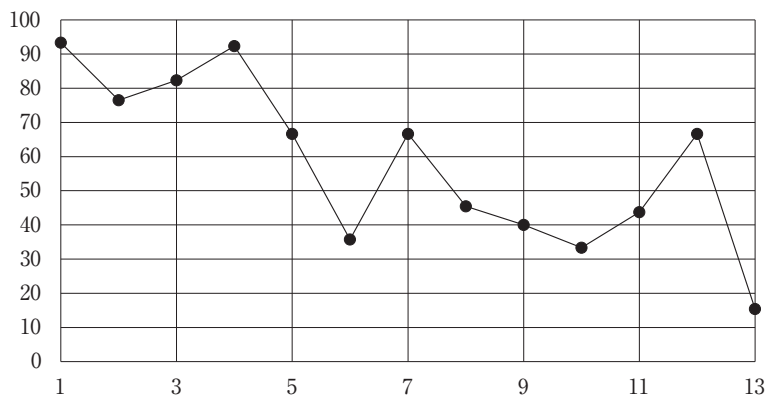
5) 私の代表的学術論文はポートルースをテーマにしたものであるが、これはポートルーサーの養成学校在籍していた学生との会話からヒントを得たことがきっかけとなっている。

表1 卒業期別の卒論数，レポート数内訳

卒業期	総数	卒論数	レポート数
6	15	14	1
7	17	13	4
8	17	14	3
9	13	12	1
11	12	8	4
12	14	5	9
13	9	6	3
14	11	5	6
15	15	6	9
16	12	4	8
17	16	7	9
18	15	10	5
12年間	166	104	62

注：10期は私が在学研究で1年ドイツに滞在していたために、卒論指導をしていない。

図1 卒論比率 (%)



3年次：3年次終了までに、卒論テーマの設定を行う。学生には、卒論を書く自由も書かない自由もあるが、卒論を書く場合は多大な労力がかかることを事前に通知。

4年次：夏休み明け（8月）：データセット完成期限（データ分析を利用する卒論を希望する場合）。

9～11月：完成データを利用し、初歩的な回帰分析を利用した仮説の検証を行う。

11月初旬（大学祭まで）：卒業論文の初稿提出期限。

11月～12月下旬：卒論を山村が読み、コメントと修正要求を学生に通知。修正過程を通して、一定水準に達しないものは「卒業レポート」扱いにする。卒論を認定するために、山村が本文全体を読み、1～4回程度論文の修正を要求する。このやりとりに、初稿提出から卒論認定まで、2～7週間程度必要となる。

12月（年内最終講義）：山村卒業論文の認定を受ける期限。

1月：ゼミ生全員で、卒業論文集の作成作業を行う（「卒業レポート」も卒論集に入れる）。最終ゼミの日に、各自持ち寄った原稿を製本業者に郵送する作業を行う。

3月：卒業式の日に、卒業証書などとともに卒論集を受け渡す。

3. 過去10年における卒論指導の変遷

ここでは、卒論の内容などの変遷について、大まかな時代別の区分を示しておく。なお、回帰分析を利用した論文比率の推移は図2のように描かれる。

図2 回帰分析利用卒論比率 (%)

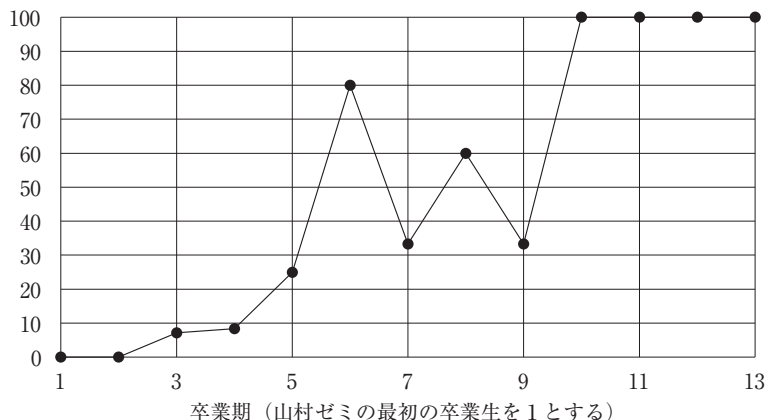


表2 テーマ分類別

内容	総数	卒論数	レポート数
スポーツ	46	34	12
家庭・教育経済	17	13	4
格差	7	4	6
その他	109	55	51
全体	179	106	73

表3 分析方法別

内容	総数	卒論数	レポート数
回帰分析利用	35	34	1
その他	144	72	72
全体	179	106	73

解釈：レポートに比べて、卒論の扱うテーマは山村ゼミ伝統のものがおおい。また、回帰分析を利用した研究は、卒論に限る。卒論は山村の指導の影響が顕著である。レポートは水準や形式にこだわらないためにテーマは多岐にわたり、学術的な形式をとらないものが大半である。

(1) 2005～2008年

過去に卒論指導の経験がないために、試行錯誤しながらゼミ生の関心にあわせて卒論テーマを設定した。データ分析などをする学生は少数であったが、9割ぐらいの学生が卒論を完成させた。スタイルは一定しないが、一般的に記述的論文が中心。

(2) 2009～2012年

テーマ設定などができず「卒論」ではなく「卒業レポート」を書く学生が増える。独自テーマを設定し記述的分析を行う学生が多い。一方で卒論テーマを設定できない学生などに対して、希望に応じて山村が具体的なテーマ提示するようになる。この場合、データ入力と統計分析、論文の書き方を具体的に指示する。

表2に示すように、「記述系論文」と回帰分析を利用した「実証分析系論文」の2タイプの論文に分かれるようになる。

(3) 2013～2018年

卒論を書く学生が、さらに減少し、実証分析系論文を書く学生が多数派となる。

4. 主な卒論テーマ

卒業論文にはある程度の傾向がある。学生の関心に沿うように研究テーマ設定をする
が、自身でテーマ設定できない場合は、私から学生が関心を持ちやすいようなテーマを
いくつか提案する。このような事情を反映して、研究テーマは表2のような傾向を持
つようになる。各テーマ内容の具体的な例としては下記のようなものがある。

- (1) 家族経済学、女性労働（女子学生の山村ゼミの伝統的テーマ）
- (2) スポーツ経済学（多くの学生が身近に感じ興味をもつ。テーマを決められない者
のために、山村が提示する）。
- (3) 世相を反映して、「格差研究」「ニート」などを扱う研究。

5. 卒論集をハードカバーで作成する利点

卒論集は形式的な過去の遺物ではなく、あらたなゼミ生の創造の手がかりとなる。
現役生が自由に貸出すことが出来、卒論作成の参考とするための貴重な教材である。

- (1) 山村ゼミでは、現役生に過去の卒論を頻繁に貸し出す。ソフトカバーでは劣化す
るのが早く、長年にわたって貸出しをすることが難しい。ハードカバーにする理
由は、山村ゼミの研究蓄積をゼミ内の公共財とし後輩世代が利用可能にすること
にある。
- (2) 「卒論」と「卒業レポート」の違いを理解するうえで非常に有効である。具体的
に山村が何を求め、どの程度の水準を「卒論」で求めるか理解させる。
- (3) 「論文」とは自己完結するものではなく、他者に理解されて始めて意味を持つ。
自分の卒論が後輩に批判的に検討されることを想定させ、自覚と緊張感を持た
せる。
- (4) 年明けのゼミナールは実質的な指導を行うことはない（卒論締め切り期限のため）。卒論を書く者も、卒業レポートを提出するものも、全員で卒論集作成のため、作業を行う。卒論集作成への関わりを通じて、ゼミ生全員のゼミナールへの帰属意識を高め、グループワークの重要性を学ぶ。ゼミ最終日に持ち寄った原稿を製本業者に郵送する作業をもって、最終ゼミの日とする。

卒業期が後になるほど、学術的なスタイルの論文が増加する一方で、卒論を書く学生の比率が低下している。卒論内容が私の研究関心と関連するため、自然と厳密な推計を行う指導をするようになった。指導方針が確立するにしたがい、要求水準が高まっている可能性がある。

補足資料

過年度の卒業生の卒論・卒業レポートのテーマ

山村ゼミ第一期生（06期生）15名

第一期生	06期	卒業論文
村上友紀		「映画産業の行方」
栗原隆敏		「『NIIT』の現状と対策」
藤江峻		「コミュニティの犯罪防止力：名古屋の少年犯罪率推移から導かれる福岡への課題」
松尾彩世		「女性労働市場について：結婚・出産後も継続就業するためには」
村上未央		「日本女性労働市場におけるM字型曲線の分析と展望」
平島有紀		「成長する中国内陸部の経済：内陸最大の都市重慶」
奥迫直気		「ごみ有料化がもたらす効果：ごみ有料化はごみ減少につながるのか？」
安部千尋		「女性労働力率増加と育児環境整備」
清水省平		「考えさせられる三連単：JRAからの挑戦状」
田中千夏		「今、CDがうれない：デジタル技術の進歩で変化したCD市場」
堤研二		「日本のたばこ事情」
本田義高		「日本における麻薬の地下経済と現状」
紙谷勇輝		「現代社会におけるファーストフード業界の存在」
関優		「日本のプロ野球産業における需要構造」
		卒業レポート
吉次昭太		「FA制度の存在」

ゼミの出来事とゼミの特徴

私にとってゼミ1期生である。それぞれに独特の個性があり、個別にあうと話が出来るのだが、ゼミ生同士のコミュニケーションがスムーズではなかった。3年次には退学者も出ている。歴代の中でも最もゼミ運営が困難な期であった。年齢は近いのだが、大きなギャップを感じた世代であると同時に、教員としての課題を痛感した期である。

山村ゼミ第二期生（07期生）17名

第二期生	07期	卒業論文
岩屋 祥太		「整備新幹線並行在来線についての考察」
小方 勝		「市街地商店街の衰退と復興」
久我 美奈子		「音楽経済の行方」
高山 幸子		「若年層の雇用問題：大卒フリーターの問題」
三丸 美和		「レジ袋有料化をレジ袋削減へと効果的につなげる条件とは？」
品川 幸太		「若年雇用の現状と対策」
鈴木 紘子		「迷走する教育改革」
高橋 透		「自動車と環境問題」
田中 志保		「『伸びるテーマパークとは』：東京ディズニーランドの成長メカニズム」
橋本 知佳		「仕事と育児の両立支援策：男性育児休暇の可能性」
松隈 達也		「Jリーグの観客動員数について」
宮島 直子		「教育投資の経済学」
渡邊 沙央里		「『幸せとは何か？』：日本とイギリスの消費」
		卒業レポート
大鶴 貴之		「プロ野球球団経営について」
竹房 大輔		「映画館産業について」
中島 康弘		「M & Aにおける敵対的買収の防衛策」
西村 淳		「犯罪率と人口密度の関係」

ゼミの出来事とゼミの特徴

一期生の指導を通し大きな課題を発見し、それを克服するために、ゼミ指導に最も力を注いだ期である。試行錯誤の成果のためか、この期はコミュニケーションが取りやすい学生が多かった。学生たちも華やかな学生が多く、典型的な西南生のイメージどおりの学生であった。年齢も近いこともあって、弟や妹のような距離感であった。また、韓国旅行も行い、イベントを多くも催していた。要するに私も学生と同じようなレベルで楽しんでいただけたわけである。

山村ゼミ第三期生（08期生）17名

第三期生	08期	卒業論文
氏名	アダ名	タイトル
赤崎 祐輝	アカチャン	「日本プロ野球産業の再編への道」
荒木 那帆	ナホ	「韓国映画の歩み」
家中 公美	イエコ	「危機に立つ新聞：変容する新聞事業」
石本 健	ケン	「日本プロ野球再建」
伊藤 紹康	ヤス	「塾業界の変遷：ゆとり教育の影響」
尾形 慶	オガッチ	「宇宙開発の経済効果：身近にある宇宙開発と平和利用」
金井 大樹	カール	「コンビニエンスストア業界：業態改革をしないセブンイレブンへ」
坂根 愛野	アヤボン	「SNS市場の発展と研究」
佐々木 智也	ササヤン	「唐津の地域経済分析」
田井村 真美	マサミ	「遺伝子組み換え作物について」
西村 直希子	マキ	「化粧品市場の変動」
西村 靖子	ヤンヤン	「生涯現役：生きがいのための労働」
藤木 太祐	ダイスケ	「ホンダの企業発展について」
山田 麻美子	コマミ	「ローティーンのファッション市場：少子化の背景で成長する市場」
		卒業レポート
内井 一広	キャズ	「人材紹介業の概要」
内田 拓也	ウッチー	「宝くじの経済学」
花井 麻紀	マキ姉	「バイオエタノールの需要増加に伴う穀物価格高騰の影響」

ゼミの出来事とゼミの特徴

この期より、学生同士及び山村との心理的距離を縮め、交流を促すためにゼミ中はアダ名を使うようになった。出席をとる時も、アダ名である。非常に活気に満ちた、ゼミであり歴代で屈指の元気よさがあった。また、私が結婚した頃だが、独身時代と同じようにある程度自由な時間もあり、ゼミの課外活動などに参加していた期である。学内の論文コンクールが、新たに開催されるようになった。応募総数が少ない上に、卒論を書いている学生に応募するように指導したため、応募者の半数ぐらいは山村ゼミ生だった。競争率が低いとはいえ、入賞した学生がいたことに喜んだ。

山村ゼミ第四期生（09期生）17名

第四期生	09期	卒業論文
氏名	アダ名	タイトル
石本和人	イシモ	「今、求められる『金融経済教育』」
角田麻衣子	マイコ	「日本のマンガ産業の発展」
光達彩香	アヤカ	「育児休業制度が照らす日本の未来」
郡久智美	ヒトミ	「イベントの経済効果」
金野由衣	ユイ	「シネコンの登場が映画産業に与えた効果」
高尾健太郎	ケンタロー	「予告先発制度の経済効果」
中村友紀	マメ	「色彩と景気の相関性の考察」
西巧	タクミ	「競争社会の中での地域格差」
橋本亜衣	コンチャン	「環境経営の効果」
南美千子	ミツチャン	「広告の力：広告が経済社会に与える影響」
山本由香里	ユカリ	「働く貧困層、ワーキングプアの現状」
吉田歩未	アユミ	「日本のビール市場の現状と展望」
		卒業レポート
森山次郎	ジロー	「たばこ産業と経済」

ゼミの出来事とゼミの特徴

この期は、私の在外研究の都合により、4年生の前期で全員の卒論及び、卒業レポートを完成させた。非常に時間的には短い時間で、みな質の高い研究成果を提出した。また、男子学生比率が高い山村ゼミとしては、歴代で最も女子比率が高い期である。ゼミリーダーの男子学生が3年生のときに入院することになったが、そのことによりゼミの結束力が高まった印象がある。1年半のゼミ活動であったが、非常に中味の濃いゼミ活動が記憶に刻まれている。困難に直面すると社会集団の団結力が高まることを示す事例である。後の社会医学研究者が在籍していた。

昨年に引続き、卒論を執筆している学生は全員学内の論文コンクールに卒論を提出した。その中に最優秀賞に輝いた学生がおり、大学の広報誌の冒頭で特集された。記憶に残る快挙であった。

山村ゼミ第五期生（11期生）12名

第五期生	11期	卒業論文
氏名	アダ名	タイトル
石田 恵美	エミ	「格差社会：所得格差から見る日本の構造の変化と所得分配効果」
井上 謙太	ケンタ	「携帯電話の必要性：未成年者の携帯電話所有率とそれに関連する問題」
北岡 亮	オカッチ	「スポーツから見る人的資本蓄積：大相撲におけるBMIと幕内成績」
木下 菜々美	キノピー	「再生エネルギーへの転換」
林 優里	リン	「広告の影響力：商業広告がもたらす経済効果」
東田 弥奈	ミナ	「健康志向からみた消費者行動：特定保健用食品の飲料」
山口 悠介	ヤマユウ	「道州制の必要性：三位一体改革から道州制導入による歳出削減効果」
吉村 隆久	ヨッシー	「外部不経済とたばこ産業」
		卒業レポート
川野 功一朗	コーイチロー	「ゆとり教育の是非」
益永 祥平	マッスン	「世代間格差」
益本 佑太	ユータ	「音楽市場におけるフリーコピーの効果」
堀田 英雄	ヒデチャン	「インターネットバンキング：既存銀行は衰退し、消滅するのか？」

ゼミの出来事とゼミの特徴

この期は、私の在外研究の都合により、3年生の後期からゼミが始まった。ドイツの在外期間中は、ゼミ募集などは四期生が対応して交流を図っていた。後期からの開始で最初はすこし学生との距離を感じたが、コンパなどを積極的に行うと非常にコミュニケーションが取りやすい学生が多かった。男女のバランスもよく、アットホームで居心地のよい期であった。四期生と同じく、1年半のゼミ活動であったが、非常に充実していた。ゼミリーダーの学生は準硬式野球部ながら、姉から教わった菓子作りを得意としており、私の妻のために手作りのティラミスを持参してもらったことも印象深い。ゼミ指導者として自信が芽生えた頃である。

この頃までは、ゼミ活動へ振り向ける時間的な余裕もあった。振り返ってみると、経験とあって最も充実したゼミ運営が可能となった時期であろう。

山村ゼミ第六期生（12期生）14名

第六期生	12期	卒業論文
氏名	アダ名	タイトル
井上和彦	カズ	「予告先発制度の経済効果」
中川良太	リョータ	「Jリーグの勝率の決定因：1996～2006シーズンデータを利用した分析」
中村秀樹	ビザ	「相撲における人的資本の蓄積」
藤田かおり	カオリ	「労働力不足時代における女性雇用について」
森山拓也	タクヤ	「Jリーグの勝率の決定因：2007～2010シーズンデータを利用した分析」
		卒業レポート
安東佳紀	アンディ	「牛丼チェーン店の比較」
池田純悟	ジュンゴ	「プロアメリカンフットボールの経済学」
井上亮太	グリーン	「音楽市場の動向：音楽配信とCDの売上げの関係」
大崎隼人	ハヤト	「日本のアニメ市場」
尾関貴紀	ピッチャー	「人的資本蓄積が野球の成績に与える影響について」
河村洋佑	ヨースケ	「商店街の衰退と繁栄」
稗田奈都季	ナツキ	「地球環境温暖化で伸びるビジネス」
吉川格	イタル	「百貨店業界の今後」
吉村有紀	ユキ	「化粧品市場の動向について」

ゼミの出来事とゼミの特徴

この期は、個性派が多く、これまでの学生の中でも、強烈な印象がある。男女比がバランスよく配合されていた山村ゼミだが、この頃より徐々に女子大の中の「男子校」としての特徴があらわれ始めた。一期生以来の困難なゼミ運営を経験した。それまでの、ゼミ指導者としての経験がまったく通用せず、自信を喪失するほどであった。彼らが在学中に発生した東日本大震災の間接的な影響もあるのかもしれない。

なぜか野球部のエースだったゼミ生が先発する試合をヤフオクドームまで全員で観戦に行った。不思議なゼミであった。実は皆で盛り上がりたいという願いがあったのかもしれない。ゼミ生の1人は、卒論は書かなかったが、ゼミのイメージソングを5曲ほど作ってくれた（NHK大河ドラマ風1曲、ヘビメタ風1曲、アイドル・アニメソング風2曲、バラード風1曲）。今も私のHPを聞くとこれらの曲を聴くことが出来る。

山村ゼミ第七期生（13期生）9名（卒論集には16名の名がある）

第七期生	13期	卒業論文
氏名	アダ名	タイトル
奈須達也	タツヤ	「トラック産業の考察」
福井康平	コーヘイ	「東日本大震災がプロ野球作業に与えた影響の分析：2010, 2011年度ベナントレースデータを利用した試合時間分析」
藤原ゆり奈	ユリナ	「働く女性と育児の両立」
山河裕明	エース	「大関昇進の要因」
吉村俊彦	カラフル	「ハイブリッドカーの販売台数の推移：プリウスはなぜ人気なのか」
		卒業レポート
濱口あずさ	アズサ	「少子化の原因を探る」
濱崎健太	ケンタ	「福岡市における韓国との人的交流」
福田弘治	パロパロ	「外国人労働者の分析」
宮崎恒星	アーミー	「大学決定における箱根駅伝の宣伝効果」

ゼミの出来事とゼミの特徴

この期は、完全に男ゼミであった。女子は3名でいずれも控えめ。卒業名簿には16名の名前があるが、7名は卒業レポートも書いていなかった。何かのきっかけで学生との距離が拡大してしまった。どこか無気力な学生たちの様子が、当時の私の許容範囲を超えてしまったのかもしれない。反省材料は多くある。もう少し適切な対応が出来たはずであり、自身の未熟さを恥じる。

六期生のように強烈な個性を持った学生だらけというわけではない。極端に反抗的だったわけではないが、つかみどころがない学生に、学生指導の難しさを感じた頃である。六期生と同じように、彼らが在学中に発生した東日本大震災の間接的な影響もあるのかもしれない。

山村ゼミ第八期生（14期生）11名

第八期生	14期	卒業論文
氏名	アダ名	タイトル
飯山成周	メッシ	「警告、退場がJリーグ選手の年俸に与える効果：1996～2012シーズンの選手レベルデータを利用した分析」
江ノ本祐樹	エノ	「Jリーグにおけるパフォーマンス研究：2009～2011シーズンを利用した分析」
片山史子	カタヤン	「賃金水準が婚姻率に与える効果」
古賀真斗	マコッチャン	「プロ野球にける人的資本の分析」
脇本咲也香	サヤカ	「日本における離婚率の上昇とその要因：福岡県在住者へのアンケート調査による分析」
		卒業レポート
有田光希	アリー	「広告宣伝費が企業の売り上げに与える影響」
岩本雄太	ローズ	「福岡県の様々なデータに関する考察」
木下祐太郎	キノピー	「大相撲と経営体制の考察」
豊島典之	トヨシー	「俺の生き方」
長岡美樹	ミキ	「戦後の日本人の未婚率上昇の要因」
橋本明人	モッティ	「弓道についての考察」

ゼミの出来事とゼミの特徴

この期は、3年次に在籍していた学生が4年次に大量に脱走してしまった（事前の連絡なく、ゼミの履修を取りやめた）。これらの学生の多くは、私から見て不満を持っていなかった。そのため、私は非常に大きな衝撃を受けたのである。この頃は、研究および様々な学内業務のために時間制約が非常に厳しくなった頃である。そのため、入ゼミ面接をしなかったことが遠因となり、学生のゼミへの帰属意識を大いに低下させたよう思える。要領よくやろうとする私に、要領よくやろうとする学生が集まった印象である。しかし、ゼミナールは要領のよさだけでは十分な効果を生まない。そのことを学んだ。

ゼミ生に残った卒業生は11名と少ないが、私としてはゼミに残ってくれたことが有難かった。数は少ないが、それぞれの学生に向き合うように心がけた期でもある。

山村ゼミ第九期生（15期生）15名

第九期生	15期	卒業論文
氏名	アダ名	タイトル
伊佐亮佑	イッサ	「ビール業界におけるアサヒビール躍進の要因の考察」
桑野駿介	シュン	「箱根駅伝が受験者におよぼす影響の分析：2001～2012年のデータ分析」
徳永江梨	エリック	「2010年代における日本航空業界の分析：格安航空は日本に定着するか」
廣田 栞	シーチャン	「地域の価値を創造するバイオマスエネルギー：ドイツと日本の比較分析」
前田真美	マミ	「ワーク・ライフ・バランス社会の考察：スウェーデン・モデルを中心として」
吉田美里	ミサト	「日本の地方自治体歳入に及ぼすマラソン大会の影響の分析」
		卒業レポート
岩橋 慧	ベーカーリー	「シェール革命によって日本はどうなるか」
内田圭介	ウッチー	「プロ野球の球団経営について」
沖中優奈	オッキー	「日本の医療体制に対する考察：病床規制の分析を通して」
金山綾花	ツン	「ハウステンボス変貌の1年」
辻 勇哉	ユーヤ	「少子高齢化問題の分析」
原田 諭	サトシ	「日本の食料自給率の考察」
日高 聖	セイ	「火山灰の活用方法についての考察：桜島の事例を中心にして」
村岡雅彦	ムラオ	「人口減少による日本経済への影響の考察」

ゼミの出来事とゼミの特徴

全体的に物静かで、真面目な学生が多かった。明るく振舞いながら悩み深い学生もいることに気付いた頃である。指導の中で、怒る場面を少なくし、学生の話聞くように心がけた。そうすることで、ゼミ生との関係も良好になっていった。学生達の多くは内に秘めたものを持っているのである。表面的な振舞いの背後にある何かに目を向けることの重要性を学んだ。

山村ゼミ第十期生（16期生）12名

第十期生	16期	卒業論文
氏名	アダ名	タイトル
阿利嘉英	アリ	「ボートレースから見る人的資本の蓄積と集積の経済理論：2014～2015年のボートレースデータを用いた分析」
池田隼貴	ジュンキ	「日本人メジャーリーガーの日米通算成績を基にした回帰分析から見る日本プロ野球（NPB）と米大リーグ（MLB）」
江藤太一	タイチ	「スーパーグローバル大学決定後の受験者数の変化」
米田恭平	キョーヘイ	「労働市場における女性と男性のパフォーマンスの比較：2014～2015年のボートレースデータを用いた分析」
		卒業レポート
市橋杏奈	アンナ	「財務諸表から見る日本航空の経営破綻」
垣澤奈央子	カッキー	「日本とアメリカにおける個人金融資産について」
河上祐一郎	ケンシン	「派遣労働はキャリアになりえるか」
久保田秋人	シュート	「ゲーム産業の動向と未来」
高橋周作	シュー	「万年筆の歴史」
鶴崎吏緒	リオ	「有料音楽配信が売上げを伸ばした要因」
林田圭吾	ケーゴ	「教育水準と経済水準の関係」
米田有佑	ヨネ	「ネット銀行業界における楽天銀行の位置付け」

ゼミの出来事とゼミの特徴

社会や家庭への適応に悩む学生やコミュニケーションのとり方に問題を持つ学生などの存在。表面的には問題ない学生も、関わってみると悩み深い学生がいた。どのようにして、ゼミ活動への参加を促すのかを考えた期である。

一方、基礎演習Ⅰを履修していた学生も多く入ってきた。基礎演習Ⅰの雰囲気よさがゼミにも反映された。能力も意欲も高い学生がいて、非常に充実した卒論指導が出来た。久々に手ごたえを感じ、自信を取り戻した期である。

山村ゼミ第十一期生（17期生）16名

第十一期生	17期	卒業論文
氏名	アダ名	タイトル
牛島辰暢	ウッシー	「Jリーガーの移籍とパフォーマンスの低下」
黒木大将	モトマサ	「プロ野球における監督の組織運営能力の検証」
小城佑太	ユータ	「ノーベル賞受賞と大学教育需要の関係性：2002年～2016年の大学入試データを用いた分析」
原田 玖実子	クミ	「国会議員の所得の決定要因に関する政治経済的分析」
松本有紀	ユキ	「スーパーグローバル大学：2014年から2015年にかけての受験者数の変化」
村上三枝	ミエ	「ふるさと納税の現状・経済効果とは」
吉村直人	ナオト	「大相撲会における外国人力士の活躍：社会主義国に生まれた外国人力士の戦う原動力」
		卒業レポート
赤嶺由佳	ユカ	「店頭販売と通信販売の比較」
浦山 邑	チャンユー	「日本の婚姻率の低下」
榊 芽衣	メイ	「東京ディズニーリゾートの経済効果について」
原田 花歩	カホ	「訪日中国人の消費拡大に向けた取り組みと課題」
原田 桜	サクラ	「派遣社員の参入による労働生産性の効率化」
藤木星伍	フジキング	「国内自動車市場と株価の相関関係について：2006年～2014年の日経平均株価・各会社株価・NYダウ平均株価を用いた分析」
森本真央	マオ	「私が愛するスポーツとスポーツの祭典オリンピック開催による開催国への経済効果についての考察」

ゼミの出来事とゼミの特徴

四期生以来、久しぶりに女子の数が男子の数を上回った。そして華やかな学生が多く、明るい期であった。東日本大震災のショックが薄れ、景気がよくなったことと学生気質は対応しているように思われる。また、十期に所属していたが、無断欠席続きで演習Ⅰの単位を落とした学生が、再度履修していた。当初は再度の履修希望を却下しようとしていたが、考え直してゼミに受け入れた。初めての経験であったが、本人は十分の努力をしてゼミに溶け込んでいった。非常に学ぶことが多い経験であった。

山村ゼミ第十二期生（18期生）15名

第十二期生	18期	卒業論文
氏名	アダ名	タイトル
大岡竜也	タツヤ	「高校の地理的分析による玉竜旗と金鷲旗のベスト8，ベスト4に入る確率：1973年～2010年の玉竜旗と金鷲旗の試合結果と福岡からの距離を用いた分析」
大倉崇弘	タカヒロ	「日本のプロ野球における予告先発制度の経済分析」
来島由紀子	ユキコ	「世界文化遺産の登録による外国人観光客の変化：2010年7月～2016年3月の47都道府県のデータを用いた分析」
古賀雄貴	パパ	「箱根駅伝が受験者に及ぼす影響の分析：2001～2015年のデータ分析」
中島優梨花	ユリキャン	「労働進出における男性と女性の差：2010～2016年のボートレースを用いた分析」
原田稔将	トシマサ	「予告先発制度と Super Star 理論の経済分析」
藤木星伍	キング	「プロ野球の入場者数の決定要因の分析：勝率効果のセリーグ・パリーグの比較」
藤原和憲	カズ	「労働市場のけるマッチング仮説の検証：2012～2015年のJリーグサッカー選手の移籍を用いた分析」
吉賀光太	コータ	「ふるさと納税件数と甲子園優勝校の関係性について」
渡邊祐馬	ナベ	「ふるさと納税における納税額と甲子園出場校の関係性：2008～2015年の春夏甲子園データを用いた分析」
		卒業レポート
坂口泰樹	ファブ	「当たり前を守られた日本の生命保険」
西宏平	ムツ	「現代日本人における宗教離れの実態」
馬場愛莉咲	アリキャン	「美しさが及ぼす経済格差」
宮本海斗	カイト	「滋賀県と山口県の人口移動についての考察」
目野美紀	ミキキャン	「子供の貧困と進学の問題」

ゼミの出来事とゼミの特徴

この期は、女子が4名と男が圧倒的に多く、十一期生との違いに驚きを感じた。そのあとの期では、さらに女子比率が低下していくとは、全く予想していなかった（十三期は女子1名、十四期は女子2名、十五期は女子0名！）。景気もよいので、華やかな女子が一定数存在し、それに刺激され男子もやる気を出すという予測は大きくはずれたのである。

予測はずれたが全体的に真面目な学生が多く、卒業論文や卒業レポートは質が十分高かった。複眼的にゼミ運営を評価する必要性を感じた。全体として、ゼミが成熟期を迎えたように思えた。

山村ゼミ第十三期生（19期生）13名

第十三期生	19期	卒業論文
氏名	アダ名	タイトル
清 宗 平	セイチャン	「全国高校野球選手権大会勝利数決定要因」
田 中 康 太	コータ	「ヨーロッパクラブサッカーリーグ順位の決定要因」
		卒業レポート
弥 永 陽 和	ヒヨリ	「女の子と名前の今と昔」
宇 野 将 鷹	ショーヨウ	「競馬場ごとの決め手について」
川 添 壮一郎	ソーイチ	「長崎の観光業」
城 戸 仁一郎	ジン	「東福岡高校の“部活動”躍進の考察」
佐 藤 健 伍	ケンゴ	「都道府県別にみる剣道のつよさ」
竹 内 大 貴	ダイキ	「スロットの設定が勝率に与える影響」
田 中 一 輝	イチ	「センバツ出場校は夏の構成縁に出場できない？」
手 島 章 良	アキラ	「アメフトにおけるフィジカル強度とチームパフォーマンスの関係」
手 嶋 圭 哉	ケーヤ	「日本プロ野球における入場者数の決定要因」
友 近 晋	ススム	「愛媛県のミカン作業とファミリーヒストリー」
藤 富 大 輔	ダイスケ	「卓球における人的資本の蓄積」

ゼミの出来事とゼミの特徴

この期は、とうとう女子が1名となった。一方、愛媛県、広島県、山口県、長崎県、大分県など様々な県の出身者が在籍し、出身地の多様性が際立った期である。私の経済実験に3年ゼミの開始から数回ゼミの時間を当てた。スケジュール上の制約があったので致し方ないが、ゼミ長、副ゼミ長、企画係などの役職を決める機会をなくしてしまった。そのため、全体としてまとまりのない集団になってしまった。2年間で開催したコンパはたったの2回。しかも、1回目は私が店の手配などをしてやっと開催した。図らずもリーダーのいない集団の意思決定に関する自然実験をしたことになる。

以上の状況になってしまったのは、学生の責任ではなく、ゼミの形が出来る前に、私が無理に経済実験を行ったことに原因がある。個別の学生をみると、多くの者は、真面目にゼミに参加し、コンパに無断欠席する者はいなかった。